

学部ディプロマ・ポリシーと修士課程アドミッション・ポリシーの 文体傾向と出現語彙傾向の比較分析

樽松理樹, 天野哲彦 (岩手県立大学)

修士課程への受験者の多くは, 同一大学同一系統の学部出身者であると考えられる。よって, 学部等のディプロマ・ポリシー (学部 DP) と研究科等の修士課程のアドミッション・ポリシー (修士 AP) には共通点が多いと考えられるが, 明らかではない。本研究では, この点に対し, 大学ポートレートから収集した学部 DP 及び修士 AP について, 文数などの文体傾向を比較分析した。また同一大学同一系統の学部 DP 及び修士 AP に出現する異語やその共有割合を分析した。結果, 文体については学科系統単位で類似傾向が見られたが, 学部 DP と修士 AP との共通する語彙は 0.31 と予想より低いものであった。主な理由として, 各ポリシーの語用, 説明の細かさの差が考えられる。

キーワード: 修士 AP, 学部 DP, 読みやすさ, 異語, 差異係数

1 はじめに

各大学は, 学部又は学科若しくは課程 (大学院にあっては, 当該大学院, 研究科又は専攻) ごとに「卒業又は修了の認定に関する方針」「教育課程の編成及び実施に関する方針」「入学者の受入れに関する方針」を定めることが『学校教育法施行規則』第 165 条の 2 によって定められている。これらの方針は順にディプロマ・ポリシー, カリキュラム・ポリシー, アドミッション・ポリシー (以後, 順に DP, CP, AP と表記) と呼ばれるものであり, 同規則第 172 条の 2 において, その公表も定められている。また学部については策定に対するガイドライン (中央教育審議会大学分科会大学教育部会, 2016) も示されている。

このような状況から, 各大学は AP を公表しており, それとともに AP の分析が取り込まれている。齋藤 (齋藤, 2013) は経済学部の AP を対象にテキストマイニングによって分析しており, さらに 3 つのポリシーの連携に関する分析 (齋藤, 2020) も試みている。根岸 (根岸, 2013) は教員養成系学部の AP の「求める学生像」を分類・分析している。この際, 医学部や教育委員会が示している「求める教員像」と比較している。

著者らも, 大学ポートレート (大学ポートレートセンター, 2014) から得た情報をもとに, 学科系統・国公立大別に AP に記載された「求める学生像」における語彙の出現割合を分析 (樽松・天野, 2021a) した。その結果, 「関心」「意欲」「基礎学力」を「求める学生像」の共通項目として見出した。さらに国公立大の令和 3 年度入試における AP を分析 (樽松・天野,

2021b) し, 「主体性」「協働」「コミュニケーション力」等, 先のガイドラインで提示された語彙の出現が増えていることを示した。

このように学部等の AP の分析は試みられているのに対し, 同様に制定・公開が定められている大学院, 研究科又は専攻 (以後, 研究科等と略記) における AP についての分析研究は見当たらない。この理由として, 研究科等の AP に対し, 学部等の AP のようなガイドラインがなく, 対象者も学部等に比べ少ないこと, 専門性が高く, 分析の方向性を決めることが困難であること等が予想される。

一方で, 教育・研究の継続性・連続性の確保から同一大学の学生が, 研究科の修士課程の受験者になることが多いと考えられる。このことから, 理想的に考えれば, 学部等の DP (以後, 学部 DP と表記) に示される人物像が, 研究科等の修士課程の AP (以後, 修士 AP と表記) に示される求める人物像に反映されていると予想される。しかし, この点についての分析については皆無である。この学部 DP と修士 AP との関係を調査することは, 各ポリシーの一体化や連続性等の質向上に貢献できると捉える。

以上の背景から, 本研究では学部 DP と修士 AP の関係の調査の第一歩として, 表層情報である文体傾向と出現語彙の共通性に着目し, 分析調査を行う。

文体傾向については 2.2.1 章で挙げる, 文数, 文の平均文字数, 単語数, 異語数, 読みやすさに着目し, これらの点について, 全体及び系統毎に比較する。ここで系統とは, 学校基本調査一令和元年度付属資料・学科系統分類表 (文部科学省, 2020) をもとに, 教

育内容や入学者の動向を考慮し、学部及び研究科を著者が分類したものである。具体的には、「人文・社会、理工、農・水産、医・歯、薬・看護、教員養成、その他」の7系統である。以後、人文・社会は人社、農・水産は農水、薬・看護は薬看、教員養成は教員と記載する。研究科については系統が異なるが、本研究では同一大学同一系統に着目して分析するため、著者が対応すると判断した学部の系統に割り振る。

出現語彙の共通性については、単語の種類（異語）に着目し、全体の頻度分析をするとともに、学部 DP 出現異語の修士 AP での出現率及び修士 AP 出現異語の学部 DP での出現率を分析する。本研究では、どのような語彙が学部 DP や修士 AP で用いられるかに着目するため、単語数ではなく、異語数を用いる。

同一大学同一系統であれば、一体化、連続性を意識して策定していると考えられること、また策定に関わる人は共通の場合が多いと予想されることから、文体傾向や出現語彙は類似していると予想される。

以下、2章において分析に利用したデータと分析方法、3章において分析結果を説明し、4章において本論をまとめ、今後の課題を示す。

2 データ及び分析方法

2.1 対象とするデータ

本研究では、国立大学・公立大学の学部 DP 及び修士 AP を対象に分析を行う。令和3年度の学校基本調査（文部科学省、2021）によれば、国公立大合計で昼間の学部は631学部、修士課程は591課程存在している。これらの学部 DP 及び修士 AP を網羅性から、大学ポートレートの大学検索より2021年10月から11月にかけて人手で収集した。

さらに (a) 同一大学において、学部名と研究科名が一致している学部 DP と修士 AP の組（例：農学部と農学研究科）、(b) 同一大学において、学部と研究科が同一系統に含まれると考えられる学部 DP と修士 AP の組（例：理学部と理工学研究科、工学部と理工学研究科）のいずれかの条件を満たす組を225組抽出した。データ数としては、単純計算で35.7%の学部、38.0%の研究科が本研究の対象となる。

抽出した学部 DP と修士 AP の組（以後 DPAP と略記）に対し、箇条書き記号の統一、誤った改行の修正等を手作業で適用したものを、2.2章に示す方法で分析を行う。また225組における各系統の数を表1に示す。対象とする DPAP の数は系統ごとに偏りが見られる。1つの要因としては、学部によっては研究科が未設置であることが挙げられる。

表1 系統別 DPAP 組数

対象組数	系統						
	人社	理工	農水	医歯	薬看	教員	その他
225	45	65	17	41	11	40	6

2.2 分析方法

2.2.1 文体傾向の分析

文体に関しては、次に示す①文数、②文の平均文字数、③単語数、④異語数、⑤読みやすさを算出し、全体、系統単位で比較分析する。

- ① 文数：句点もしくは改行までを1文とした文の数。見出しも1文として処理する。
- ② 文の平均文字数：1文あたりの文字数の平均。文字には句読点や記号も含める。
- ③ 単語数：形態素解析によって切り出した単語（形態素）の数。形態素解析とは、文を言語として意味を持つ最小単位である形態素と呼ばれる単位に分解する処理である。基本的には品詞単位に分割する。本研究では、形態素解析には、プログラム言語の1つであるJavaのライブラリ lucene-gosen-4.0.0-ipadic を用いた。今回、句読点、記号は表記に関する役割と捉え、単語数には含めない。また複合語は複数の単語に分割される場合がある。
- ④ 異語数：抽出した単語の種類（異語）の数。品詞が異なる場合も異なる種類とみなす。例えば「咲いた、桜が咲いた」であれば、単語数は「咲いた」「桜」「が」「咲いた」の4だが、異語数は「咲いた」「桜」「が」の3となる。
- ⑤ 読みやすさ：本研究における読みやすさとしては、一見した際の印象として考え、文字種の割合等に着目する。この点に着目した読みやすさの評価式としては、式1に示す建石ら（建石・小野・山田、1988）により提案された評価式がある。本評価式は文字種を重視しており、本研究と合致性が高い。このことから本研究では本評価式を用いて読みやすさを求める。

$$\text{読みやすさ} = -0.12ls - 1.37la + 7.4lh - 23.18lc - 5.4lk - 4.67cp + 115.79 \quad \dots \text{式1}$$

式1において、*ls* は文の平均長、*la* はアルファベット連の平均長、*lh* はひらがな連の平均長、*lc* は漢字連の平均長、*lk* はカタカナ連の平均長、*cp* は句点あたりの読点数を示す。連とは「異種文字で区切られた同一文字種の連なり」を指し、平均長の単位は文字数である。

これらの値の算出、分析には独自開発のプログラムを用いた。

2.2.2 学部 DP と修士 AP の出現語彙の共通性分析

学部 DP と修士 AP の出現語彙の共通性については、学部 DP、修士 AP ごとに策定単位で出現頻度の高い異語を抽出・比較する。また (a) 学部 DP から抽出した異語の修士 AP における出現率、及び (b) 修士 AP から抽出した異語の学部 DP における出現率を全体、系統単位で比較する。

3 分析結果

3.1 学部 DP と修士 AP の文体傾向の比較分析

文数、文の平均文字数、単語数、異語数、読みやすさの各項目について、学部 DP 全体、修士 AP 全体の分析結果を表 2、表 3 にそれぞれ示す。各表において、Q3 は第 3 四分位数、Q1 は第 1 四分位数、SD は標準偏差を示す。また変動係数は、SD を平均値で割ることにより求める値であり、格差（データのバラツキ）を示す。上限値は、最大値を基本とするが、最大値が $Q3+1.5 \times$ 四分位範囲を超えた場合、 $Q3+1.5 \times$ 四分位範囲を用いる。これは極少数の学部 DP や修士 AP の値が他の値とかけ離れたものがある点を明示するためである。また上外れ数は、上限値より大きい値となった学部 DP、研究科 AP の数を示す。同様に下限値は最小値を基本とし、最小値が $Q1-1.5 \times$ 四分位範囲より小さい場合は、 $Q1-1.5 \times$ 四分位範囲を下限値とする。また下外れ数は下限値未満の値となった学部 DP、修士 AP の数である。なお学部 DP や修士 AP は 1 つの項目で上限値より大きいまたは下限値未満でも、他の項目では範囲内の場合もある。上外れ数、下外れ数は整数値、変動係数は、小数第 3 位で、その他の値は小数第 2 位で四捨五入した値を示す。

文数は、全体的に学部 DP のほうが多い傾向がみられる。また SD や変動係数等から、学部 DP のほうが学部でのバラツキが大きい。また上限値を上回る数は学部 DP のほうが多い。

文の平均文字数は、逆に修士 AP のほうが多い傾向がある。一方でバラツキは修士 AP のほうが小さい。上限値を上回る数は同等である。これらのことから、修士 AP は、少数の比較的長い文で記載される傾向が見て取れる。

単語数については、学部 DP のほうが多く、またバラツキも大きい。上限値を上回る数も学部 DP のほうが多い。異語数についても同様の傾向がみられるが、学部 DP と修士 AP との差は、単語数ほど小さくなく、また変動係数の値は学部 DP、修士 AP は近い値とな

っている。このことから、学部 DP、修士 AP とともに同一語句を多用していると考えられる。

読みやすさについては、学部 DP と修士 AP の差はほとんどない。また上限値を上回るものは無いが、下限値を下回るものが若干存在する。読みやすさについては、同種の文字の並び（連）の影響が大きいことから、これらの使い方が類似していると考えられる。

表 2 学部 DP : 全体の値

項目	文数	平均文字数	単語数	異語数	読みやすさ
上外れ数	23	16	29	18	0
上限値	36.0	85.0	673.5	242.5	136.5
Q3	18.0	57.0	378.0	154.0	106.9
中央値	11.0	47.0	256.0	120.0	98.7
Q1	6.0	38.3	181.0	95.0	87.1
下限値	1.0	20.4	46.0	38.0	57.6
下外れ数	0	0	0	0	9
平均値	17.5	52.7	378.3	134.6	95.4
SD	23.9	28.6	425.5	66.0	18.0
変動係数	1.36	0.54	1.12	0.49	0.19

表 3 修士 AP : 全体の値

項目	文数	平均文字数	単語数	異語数	読みやすさ
上外れ数	10	14	10	5	0
上限値	30.0	97.5	754.0	242.5	145.6
Q3	15.0	62.2	391.0	148.0	110.3
中央値	9.0	50.6	242.0	112.0	99.1
Q1	5.0	38.6	149.0	85.0	86.8
下限値	1.0	22.9	42.0	35.0	51.4
下外れ数	0	0	0	0	8
平均値	11.8	54.9	300.2	122.0	96.2
SD	8.8	22.3	203.6	50.7	17.5
変動係数	0.74	0.41	0.68	0.42	0.18

次に系統毎の傾向について比較する。表 2、表 3 に示したように他の値とかけ離れた値も存在する。また項目によって外れ値となる学部 DP や修士 AP は異なる。以上のことから、中央値、四分位範囲、上位・下位それぞれ 5%を除いたトリム平均を求め、比較する。

表 4 に学部 DP における系統毎の各項目の中央値、四分位範囲 (IQR と表記)、トリム平均 (トリムと表記) を示す。また、表 5 に表 4 と同様に、修士 AP における系統毎の各値を示す。表記方法は表 4 と同じである。

学部 DP においては「人社」は、平均文字数が多い文を少数使う傾向が見て取れる。また読みやすさはや

や低い値である。これは文や漢字連の平均長が長いほど低くなりやすいことが要因と考えられる。

一方、「理工」「農水」「医歯」「薬看」は平均文字数が少ない文を多く使う傾向がある。「教育」「その他」は平均文字数が少ない文を少数使う傾向がある。

結果として読みやすさが高くなる傾向がある。

表4 学部 DP : 各系統の値

項目	系統	人社	理工	農水	医歯	薬看	教育	その他
文数	中央値	10.0	11.0	12.0	14.0	13.0	10.0	8.0
	IQR	11.0	16.0	10.0	13.0	9.0	11.3	4.5
	トリム	12.5	17.2	15.7	13.0	13.0	12.8	9.3
文の平均文字数	中央値	52.5	43.2	48.1	46.7	47.9	45.6	61.1
	IQR	29.0	18.5	15.2	18.8	13.6	16.0	11.6
	トリム	60.0	44.6	49.4	46.6	56.6	47.2	58.8
単語数	中央値	262.0	225.0	301.0	259.0	277.0	259.0	235.0
	IQR	230.0	279.0	188.0	226.0	103.0	166.2	60.5
	トリム	335.6	342.7	372.3	332.5	279.8	272.5	265.7
異語数	中央値	129.0	116.0	136.0	123.0	129.0	124.5	117.5
	IQR	66.0	78.0	34.0	74.0	31.5	61.0	21.8
	トリム	134.0	128.0	135.4	139.4	131.1	115.8	121.3
読みやすさ	中央値	96.0	99.2	95.9	96.7	92.6	104.8	86.6
	IQR	35.6	16.0	12.0	14.8	26.6	14.3	17.2
	トリム	92.3	97.9	96.2	96.32	86.4	102.9	83.2

表5 修士 AP : 各系統の値

項目	系統	人社	理工	農水	医歯	薬看	教育	その他
文数	中央値	10.0	8.0	8.0	8.0	5.0	15.0	10.5
	IQR	5.0	6.0	7.0	11.0	10.5	13.2	7.2
	トリム	10.7	10.5	11.0	10.8	8.3	14.4	11.8
文の平均文字数	中央値	58.6	49.2	56.0	42.8	61.8	50.1	58.4
	IQR	26.1	17.9	23.8	19.2	41.3	21.5	6.6
	トリム	61.0	48.6	60.1	48.2	65.2	51.2	57.9
単語数	中央値	298.0	203.0	188.0	211.0	210.0	349.0	317.5
	IQR	217.0	181.0	97.0	219.0	161.0	321.2	130.0
	トリム	317.3	246.7	288.1	251.7	234.9	356.9	345.2
異語数	中央値	131.0	101.0	102.0	105.0	112.0	141.5	126.0
	IQR	67.0	67.0	19.0	63.0	50.0	80.0	39.5
	トリム	130.3	110.7	118.6	110.9	113.7	135.0	127.5
読みやすさ	中央値	95.6	98.4	92.4	100.1	76.7	104.3	104.9
	IQR	17.6	10.8	19.0	14.8	16.4	11.6	8.8
	トリム	0.19	0.11	0.21	0.15	0.21	0.11	0.08

表6 学部 DP 出現異語の修士 AP での出現率

系統	全体	人社	理工	農水	医歯	薬学	教育	その他
最大値	0.79	0.62	0.79	0.49	0.48	0.54	0.56	0.41
Q3	0.36	0.36	0.38	0.37	0.32	0.46	0.43	0.33
中央値	0.28	0.31	0.26	0.32	0.23	0.27	0.34	0.29
Q1	0.20	0.23	0.19	0.25	0.17	0.19	0.22	0.27
最小値	0.05	0.11	0.05	0.15	0.08	0.17	0.11	0.15
平均値	0.29	0.29	0.29	0.31	0.25	0.32	0.33	0.29
SD	0.12	0.11	0.14	0.10	0.10	0.15	0.13	0.09
変動係数	0.43	0.39	0.49	0.33	0.41	0.47	0.39	0.29

表7 修士 AP 出現異語の学部 DP での出現率

系統	全体	人社	理工	農水	医歯	薬学	教育	その他
最大値	0.79	0.66	0.64	0.71	0.58	0.62	0.79	0.53
Q3	0.41	0.40	0.42	0.52	0.37	0.37	0.38	0.30
中央値	0.32	0.29	0.32	0.40	0.32	0.34	0.28	0.28
Q1	0.24	0.23	0.25	0.29	0.26	0.30	0.19	0.23
最小値	0.06	0.11	0.06	0.09	0.14	0.26	0.10	0.18
平均値	0.33	0.32	0.34	0.42	0.33	0.35	0.31	0.30
SD	0.13	0.12	0.13	0.16	0.10	0.10	0.16	0.12
変動係数	0.40	0.39	0.39	0.39	0.32	0.28	0.51	0.40

全体として修士 AP は、学部 DP よりも値が小さい傾向にある。このような傾向が出る理由としては、学部 DP のほうが修士 AP よりも項目数が多いことが考えられる。また系統毎の特徴は、やや異なっている。これは系統毎の学科等の数と研究科、専攻等の数の関係が関与していると考えられる。これらの点については今回検証していないため、今後、分析を行う。

3.2 学部 DP と修士 AP との出現語彙傾向分析

学部 DP と修士 AP の出現語彙傾向について、表6に学部 DP に出現する異語の修士 AP における出現率の基本統計量を、表7に修士 AP に出現する異語の学部 DP における出現率の基本統計量を示す。平均値、中央値は 0.30 前後が多く、学部 DP と修士 AP とで語彙が異なる傾向が見られる。また変動係数は 0.30 前後が多く、バラツキはあまり見られない。

表8に、学部 DP、修士 AP それぞれについて、全体の出現数上位 20 語を示す。ここで出現数は、当該語を含む学部 DP や修士 AP の数であり、総出現数ではない。表8において、斜体になっている異語は、学部 DP、修士 AP のどちらにおいても出現数上位 20 語に入っている語彙である。また表8の差異係数は、次の式2で求める値である。

語 w の差異係数 = (修士 AP における w の出現数 - 学部 DP における w の出現数) ÷ (修士 AP における w の出現数 + 学部 DP における w の出現数) …式 2

差異係数は 1 に近いほど修士 AP に偏って出現しており、-1 に近いほど学部 DP に偏って出現していることを表す。表 8 において -0.5 以下、または 0.5 以上は斜体としている。1 に近い、修士 AP に偏っている異語としては「入学」「選抜」「専攻」、-1 に近い、学部 DP に偏っている異語としては「学位」「授与」「学士」がある。

表 8 学部 DP, 修士 AP 出現異語 (上位 20 語)

学部 DP			修士 AP		
異語	出現数	差異係数	異語	出現数	差異係数
知識	202	-0.06	研究	212	0.35
社会	201	-0.10	専門	196	0.01
能力	199	-0.06	知識	178	-0.06
専門	194	0.01	能力	175	-0.06
身	170	-0.34	社会	165	-0.10
学位	167	-0.87	教育	153	0.02
授与	167	-0.94	人	152	0.48
解決	164	-0.22	分野	152	0.05
学士	161	-0.67	意欲	150	0.63
理解	157	-0.41	基礎	149	0.08
修得	156	-0.61	入学	142	0.92
課題	151	-0.14	学生	139	0.14
教育	148	0.02	課程	138	0.38
コミュニケーション	143	-0.44	人材	124	0.16
科学	138	-0.07	科学	119	-0.07
分野	137	0.05	選抜	114	0.98
倫理	131	-0.36	課題	113	-0.14
実践	129	-0.14	専攻	109	0.83
国際	127	-0.11	学力	108	0.55
基礎	126	0.08	解決	105	-0.22

表 9 学部 DP と修士 AP の項目間の相関係数

系統	全体	人社	理工	農水	医歯	薬学	教育	その他
文数	0.19	0.26	0.34	-0.05	0.02	0.31	0.14	-0.55
文字数	0.17	0.08	0.15	0.15	0.24	0.55	0.04	0.16
単語数	0.20	0.28	0.39	-0.23	0.07	-0.21	0.18	-0.53
異語数	0.19	0.24	0.31	-0.32	0.17	-0.36	0.28	-0.55
漢字数	0.21	0.24	0.28	0.07	0.22	0.48	-0.03	-0.08

3.3 評価・考察

はじめに、文体傾向について述べる。端的に言えば、人文科学系、社会科学系は、1 文が長く、自然科学系は 1 文が短い傾向があるといえる。これは、列挙する際に、人文科学、社会科学系は接続詞で併記するのに対し、自然科学系は箇条書きにする傾向があることが要因の 1 つと考えられる。今後は、係り受け解析等を用いて、文型についても分析を加えるとともに、それぞれの分野の論文での記載方法を比較することで、より文体傾向の解析を進める。

修士 AP においても、全体的には類似した傾向が見られる。しかし、系統間の相対的な値の関係は学部 DP と異なる場合も見受けられる。この点に対し、学部 AP と修士 AP の各項目の全体、系統毎の相関係数を求め、比較を行った。各相関係数の値を表 9 に示す。「その他」は、文数、単語数、異語数が負の相関が 0.5 以上の項目が見られる。これはデータ数が影響していると思われる。また「薬看」の文字数が 0.55 と高い以外は、値が低く相関があるとは言い難い。

異語数と単語数との関係においては、全学部 DP における異語数 ÷ 単語数の平均値は 0.47、SD は 0.17、変動係数は 0.36 とバラツキも少ない。また全修士 AP における異語数 ÷ 単語数の平均値は 0.47、SD は 0.12、変動係数は 0.25 となり、平均値は同じであるが、バラツキは学部 DP よりも小さい。このような傾向となる理由としては、単語、異語に含まれる冠詞や助詞、学科名や専攻名、受験生や学生等、繰返し利用する語句の存在が考えられる。今後は語句の出現総数にも着目した解析を行うとともに、他の公文書と比較し、学部 DP、修士 AP の特徴を分析する。

読みやすさは、文の平均長、アルファベット連・漢字連の平均長が大きいと、値が低くなる。そのため、比較的長い専門用語や専攻名が出現しやすい学部系統が読みやすさが低くなると考えられる。今後は漢字連等の各要素についても分析を行うとともに、他の評価式の利用や独自の評価方法について検討を行う。

次に、学部 DP と修士 AP に出現する異語について述べる。学部 DP、修士 AP とともに高い異語としては、「専門」「知識」「能力」「社会」がある。これらは多用できる語であり、大学の学びにも関連するため、多くの学部 DP、修士 AP に出現すると考えられる。

また先に述べたように「学位」「授与」「学士」や「入学」「選抜」「専攻」「意欲」「学力」等各ポリシーと関連深い語は該当するポリシーに出現が偏っている。これは各ポリシーの目的と合致している。

一方「研究」については、修士 AP の出現率は

94%と高いが学部 DP では 45%に留まっている。これは教育課程において、卒業研究を取り組むかによって左右されると考えられる。また研究そのものは成果であり、学部 DP では、研究活動を行うために必要な能力に着目し、記述を細分化していると考えられる。

また「倫理」「コミュニケーション」については学部 DP に出現が偏っている。これらは身につける能力であることから DP との親和性が高いと考えられるが、入学者に求めるものとして挙げにくい可能性がある。修士 AP で出現数が少ないのは、ほかの語句で表記されている可能性が高いためと考えられる。

全体として、同一大学同一系統の学部 DP と修士 AP との間では、語彙の共通性は 30%にとどまっている。理由としては、対象者・目的に合わせた語用の違いが考えられる。学部 DP では、教育課程・内容に合わせ、具体的、専門性の高い語句や表現が用いられるのに対し、修士 AP は、より一般的、抽象度が高い語句を利用する傾向があると言える。特に修士 AP では、社会人や留学生も含め、同一大学同一系統以外からの受験生も想定し、広い範囲を設定していること、学部卒業生のうち、研究科に進む学生に求める資質を絞り込んでいることが考えられる。

4 おわりに

本稿では、主に教育・研究の継続性の観点から、同一大学同一系統間の学部 DP と修士 AP は、文体や出現語彙の共通性が高いという仮説を立て、大学ポートレートより収集した情報を比較分析した。文体について、文数、文の平均文字数、単語数、異語数、読みやすさにおいては、系統毎に一定程度の特徴は見いだせたが、語彙(異語)の共通性は低いものであった。

理由の 1 つとしては、同音意義語や表現の差異が考えられる。対象者が広い修士 AP は比較的抽象的になりやすい傾向があり、対象者が限定される学部 DP は専門性の高い語彙が使われる。結果、語彙は異なりやすい。しかし、人が読んだ場合、意図している内容が同等と判断できるものが多い。この点について今回の手法では対応できず、評価が困難である。また今回用いたデータは大学ポートレートのデータであり、作成時期のずれも考えられる。

以上を踏まえ、今後の課題としては、最新の学部 DP、修士 AP の収集、表記内容を考慮した分析等が挙げられる。具体的には、人手による解析、類義・概念辞書の活用、共起・因果関係分析等を行う。また学部 DP や修士 AP を策定単位に分割し、より詳細内分析や関連の可視化に取り組む。また文体については、

樺島ら(樺島・寿岳, 1965)が提案している名詞率や MVR 等を活用した評価や読みやすさの構成要素単位の評価が挙げられる。

謝辞

データ収集に助力いただいた臨時職員の方に謝意を示します。

参考文献

- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2016). 「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/_icsFiles/afiedfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf (2023年1月6日アクセス)
- 大学ポートレートセンター (2014). 大学ポートレート, <https://portraits.niad.ac.jp/> (2023年1月6日アクセス)
- 樺島忠夫, 寿岳章子 (1965), 「文体の科学」, 綜芸舎
- 樽松 理樹・天野 哲彦 (2021a). 「アドミッション・ポリシーにおける「求める学生像」の分析」『大学入試研究ジャーナル』 **31**, 1-6.
- 樽松 理樹・天野 哲彦 (2021b). 「アドミッション・ポリシーにおける語彙動向分析」『令和3年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会研究発表予稿集(オープンセッション用)』, 91-96.
- 文部科学省 (2020). 学校基本調査-令和元年度 付属資料・学科系統分類表, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2019/08/05/1407357_5.pdf (2023年1月6日アクセス)
- 文部科学省 (2021). 令和3年度学校基本調査, http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm (2023年1月6日アクセス)
- 根岸 千悠 (2013). 国立大学教員養成系学部におけるアドミッション・ポリシーの特徴-「求める学生像」の分類を通して-千葉大学大学院人文社会科学研究所 研究プロジェクト報告書第262集『社会とつながる学校教育に関する研究』 50-57.
- 齋藤 朗宏 (2013). 「各大学経済学部におけるアドミッション・ポリシーのテキストマイニングによる分析」『大学入試研究ジャーナル』 **23**, 171-178.
- 齋藤 朗宏 (2020). 「3つのポリシーの連携に関する分析」『大学入試研究ジャーナル』 **30**, 74-79.
- 建石 由佳・小野 芳彦・山田 尚勇 (1988). 「日本文の読みやすさの評価式」『情報処理学会研究報告ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI)』 **1998**, (25) (1988-HI-018), 1-8.